

延岡高校：総合的な探究の時間 「山桜プロジェクト～地域研究」

延岡高校の2年生(普通科)は、総合的な探究の時間に「山桜プロジェクト」という地域研究を行っています。これは、延岡市が直面している諸問題を高校生の視点で考え、その解決策や打開策をグループで協力して模索し、最終的には、延岡市長に提言という形で発表するという内容の取組です。今回は、5つの分野(食・農、教育、産業・工業、医療・福祉、観光)ごとに5名の講師に延岡市の状況等についてお話をしていただき、今後の探究へのねらいにせまり、活動の方向性を見出すというものでした。各講師の熱い語り口に、生徒も集中して聞き入り、今後の活動への意欲を高める時間になりました。



【食・農～田口正幸さん】



【教育～伊東洋之さん】



【産業・工業～稲田 健さん】



【医療・福祉～榎本雄介さん】



【授業の様子】



【観光～谷平興二さん】

もし自分がキャリア教育を受けていたら

川島小学校 校長 本部 博一

もし自分が小学校時代にキャリア教育を受けていたら、一体どんな進路選択をしたらと思うことがあります。インターネットも何も無く、情報がテレビ以外にはほとんど無いような時代(当然、図書室はありましたが、自分は全く縁が無かった。)、自分の身内は、ほぼ職業系の高校で終わり。さらに進学する者もおらず、高校で学校が終わるのが当たり前な環境でした。

それを変えてくれたのは、6年生の時の担任の一言でした。「お前は高専(都城)に行かせてもらえ。」当時(高度経済成長期真っただ中)、高専は職業系の学校の花形で、進学希望も多い学校でした。家が建築業(左官)だったこともあり、そういう話をされたのでしょうが、家に帰り、そのことを話した時、父が大変喜んだのを今でも覚えています。その時初めて漠然としたものではありませんでしたが、高校から先の進学を考えるようになりました。



もしも、あの一言が無かったら、今の自分は無かったかもしれません。小学校時代の一言で一生が決まることもある。そういう思いで、子どもたちには様々な経験をさせ、刺激を与えていきたいと思っています。

～キャリア教育実践交流会～

8月はお休みします。次回の交流会はオンラインで行う予定です。

「今だからこそキャリア教育を」

浦城小学校 校長 坂本 哲也

今回のコロナウィルスのこと、自分に何ができるかを見つめ直すとともに一層、キャリア教育の大切さを痛感しました。誰もが社会の一員としてそれぞれの仕事に誇りをもち、力強く生き抜く力、困難を乗り越えるためにあきらめず自分を信じて精一杯努力し、仲間と共に協力し工夫し支え合う力が今、問われています。本校では「心の居場所」「絆づくりの場」となる魅力ある学校にするために、児童が「分かる！できた！」と実感できる授業、きめ細かな生徒指導に全職員で取り組むとともに、地域の人材や教材を積極的に活用し学校・家庭・地域が一体(チーム)となって、将来の担い手である児童にしっかりとした学力、体力や社会性、耐性を身に付けさせ、地域を愛し、地域に積極的に貢献できる人材の育成、学校の教育力を生かした地域の活性化に力を入れています。今できることを精一杯やり抜く姿勢が、将来につながる子どもたちの大きな礎になると信じています。



「島野浦島＝宝島」

島野浦小学校 校長 早田 茂美

島野浦小学校は、浦城小学校近くの浦城港から高速艇で10分(フェリーなら20分)：片道470円の島野浦島にある唯一の小学校(全校児童23名)です。小学校1年生から、あいさつ指導や清掃活動、当番活動、係活動、ボランティアなど、キャリア教育の素地づくりとなる活動に計画的に取り組んでいます。また、各学年における教科や道徳、特別活動などでもキャリア教育を意識した学習の展開を心がけています。



本校ならではのキャリア教育の取組として、低学年では生活科で、島にあるお店の探検に出かけます。中・高学年の総合的な学習の時間や社会科では、種々の施設に出かけ、働いている方々の喜びや工夫、苦勞などを伺い、職業に関する意識の基盤形成を図っています。島民約800人の島ですが、延岡市役所島浦支所、離島センター、郵便局、派出所、診療所、保育所、漁業協同組合、お店、魚の加工場、フェリーの事務所、漁業体験(魚釣り)など、「キャリア教育の学びの宝」がぎゅっと詰まった「宝島」です。

キャリア教育のヒドゥンカリキュラム

島野浦中学校 校長 渡会 洋一

私の実家は農家で、子どもの頃は手伝いをするのが当たり前でした。黙々と手際よく仕事をする父や年の離れた兄の背中を見て育ちました。稲刈りでも小1、小2と学年が上がるごとに任される役割が変わり、田の四隅に生える稲を鎌で刈る仕事から、米を袋詰めし運搬する作業、遂にはコンバインを操縦し稲を刈る役職まで上り詰めます。その度に誇らしい気持ちになっていました。「認められ・信頼され・任される」。振り返ると、私のキャリア発達の何割かはこのように進んでいたようです。自己肯定感や自己有用感とともに。

私たち教師を含め、普段子どもたちの身近にいる存在が、子どもたちにとっての憧れや目標、夢を抱かせ道標となる存在であり得たなら、そのこと自体が立派なキャリア教育なのかもしれません。その身近な大人たちの職業を直接目指さなくても、その人たちの働き方や生き方に触れることが、血となり生涯に渡り流れ続けるに違いないのです。

